

信州大学での留学生活

2004年10月～2005年8月受入交換留学生
韓国カトリック大学言語文化学部 4年
金 吉玲 (キム・キルリョン)

1. 「信州大学への留学のきっかけ」

2004年10月、私の信州大学での留学生活が始まった。

他の後輩達と違って私は、カトリック大学で4年の前期授業を終え、日本語能力試験にもおととし合格しているため、卒業だけをひかえた学生であった。まず私が信州大学への留学を決意した理由は、日本人学生はどのような授業を受けているのか、韓国の大学生とどのように違う考え方をしているのか、などについて知りたかったからだ。また、カトリック大学で勉強してきた日本という国で、日本人学生と一緒に同じような授業を受けてみたいという気持ちが強くあった。もう一つ、私には2003年に東京にある日本語学校に通った経験があることも大きな理由だ。というのは、日本語学校では毎週20時間もの日本語の勉強ができるが、本来私が願っていた日本人との付き合いや日本文化の体験はなかなか実現できないことであった。もう一度日本で語学研修をしながら、日本文化を更に体験したいと考えた私は、2003年に韓国に戻り、次年度の交換留学生に選ばれるように授業や試験に全力を尽くした。

2004年4月、東京から3時間ぐらい離れている長野県の信州大学へ交換留学生として行くことが決まった。その時は大変喜んだ。信州大学は日本の国立大学であり、他の面でもいろいろ優れているところがあると知り、私はこのような大学で研修できることは本当にありがたいと思った。

2. 「信州大学での授業」

私は韓国の大学にいる時に、日本語や現代日本の大衆文化などについて勉強していたため、日本にいる時は日本語教育学科に所属されることになった。そして、前から興味を持っていた日本語教育概論や日本語学演習などの授業を受けることができた。人文学部の授業以外には、留学生向けの日本伝統文化実習や日本語の表現などの科目も受けた。伝統文化の授業では琴の演奏、茶道、生け花、民謡などを実習することができ、とても興味深く感じた。このような日本の伝統文化に

触れる体験は、以前、日本語学校に通っていた時には実現できなかったことなので、非常に貴重な経験になった。

韓国の大学のカリキュラムと日本の大学のカリキュラムの違いは、日本の大学は指導教員の制度があることだった。学生が指導教員を選び、その先生のゼミに参加し、卒業論文を書く練習や発表練習などを行う。韓国ではこのような授業形式は珍しいものである。発表が終わってから質疑応答の時間があることは、学生が研究能力を養う点でいいと思った。はじめのうちは、自分の意見や韓国と日本の相違点などについて言及することはとても大変だったが、少しずつ話せるようになってきた。特に共通教育のゼミでは、様々な学部から来た日本人学生が、授業で取り扱った方言に関する自分たちの意見などを聞くことができ、とてもいい勉強になった。このような授業に参加できたおかげで、私のこの信州大学でのキャンパス生活はとてもいいスタートがきれたように思った。

3. 「松本での生活」

日本に留学が決まった時、私は日本語の勉強が重要であるのは当然として、いろいろな日本人との出会いや韓国との違いなども体験してみたいと思った。その中で私にとって非常に貴重な体験がある。まず、最初は指導教員の沖先生から紹介してもらった小林家族との出会いだと言える。今も「お母さん」、「お父さん」と呼んでいる。この前、母の日を迎え、お母さんにカーネーションをプレゼントした。お母さんとお父さんはいつも親切にカトリック大学から来ている留学生の面倒をみてくださる。いつも、おいしい料理を食べさせてくれ、またときには私たちが遠くまで行けない場所に案内してくださる。小林さんの家族と接しながら感じた日本人家族のぬくもりは、一生忘れられない思い出になるだろう。

次は、信州大学で韓国語のボランティア教師になったことだ。今も毎週火曜日に二時間ずつ、韓国語に興味を持ち、韓国文化に触れたいと思っている方を対象にして韓国語と韓国文化を教えている。最初は、みんなの前に立って韓国語を教えるのはやはり大変だった。二時間教えるために、私はその二倍か三倍かの時間を費やして準備をする必要があった。今は韓国語を教える方法に少しずつ慣れてきて、緊張せずに楽しく授業をすることができる。もちろん、私も学生の方から日本語や日本の文化などを教わることができ、とても貴重な体験だと思っている。これからも残り少ない時間ではあるが、最後まで継続してやりたい。

そしてもう一つは、翻訳のアルバイトの経験だと言える。長野県内にあるアルピコという会社から頼まれた、信州の観光案内パンフレットを韓国語に翻訳するアルバイトだ。韓国では、日本と言えば東京、大阪、北海道といった観光地がよく話題になるが、長野はほとんど知られていないと言っても過言ではない。今回の仕事は、アルピコが作った観光パンフレットを、韓国人にも分かりやすいよう

に韓国語に訳すことである。先週から始めたが、なかなか思い通りに進まないところもあった。なぜなら、今まで授業や教科書で習った日本語と違うたくさんの表現が出てくるからだ。私にとってはとても役に立つアルバイトだと思う。その上、私のチューターの典子と一緒に辞書を調べながら訳すことで、だんだん分かるようになっていくのがとても楽しいし、勉強になる。

今後、私たちが翻訳したパンフレットが韓国で配布され、韓国人の観光客を誘致するのに役立つように、責任感を持って翻訳に全力をあげたいと思う。

ここに挙げたこと以外にも、人文学部や留学生センターの多くの行事を通して、温泉体験やスキー大会などの経験ができた。このような体験は日本に来てはじめての体験であった。

これから後、三ヶ月残っている信州大学での留学生生活を、一生の財産にできるように努力していきたいと思っている。

(2005年6月8日)